

第

二

編

木
村

毅

木村 毅（きむら き）

明治二十七年岡山県に生れる

大正六年早稲田大学英文科卒業

明治文化研究会会長 松蔭女子学院大学教授

早稲田大学校史監修

昭和五十四年九月歿

著書「小説研究十六講」「日米文学交流史の研究」

「丸善外史」「早稲田外史」「私の文学回顧録」

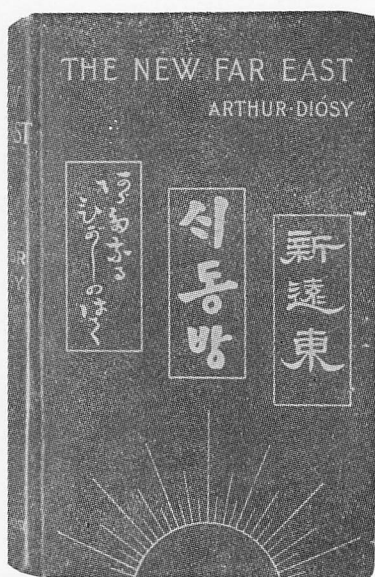
第一章 日清談判破裂して（上）

一 「新遠東」の誕生

明治二十七年と二十八年は、この兩年にわたってたたかわれた日清戦争によって、一般には最も広く深く記憶せられているであろう。それは今からみると、わが全戦死傷者の数が、現今、自動車が一年にわたってつくる災害者の数にはるかに充たず、全戦費も一夏のビルディングのおこす火災に及ばない。まことに小規模だが、それは時代をへだてて見るからのもので、その当時としては日本の国力をあげての総力戦であり、世界的にも十九世紀棹尾の大戦とみられた。

アーサー・ディオシイ (A. Diösy) に「新遠東」(表紙にこう漢字でかき、別に The New Far East と入れている) という著書がある。著者はロンドンの日英協会の会長で、この書は日清戦争が終ってから、それが日清韓三国に与えた変貌を、とくに日本中心にかいて名著といわれ、日露戦争までの数年に第四版を出している。その開巻第一頁にいう。

「一八九四年九月十一日の午後から日没にかけ、朝鮮灣すなわち、河洋島と大同江のあいだの海上で大砲が雷鳴のようにとどろき、『新遠東』の誕生を世界に告げた」



A. Diósy-The New Far East

そしてトラファガル以来もっとも重大な海戦に日本は白人発明の新兵器を巧妙に駆使して（たとえば魚形水雷も発明以来実戦にもちいたのはこの時における日本が初めてであった）、清国に大勝し、国威を伸長した経過をかいいてヴォルハイムの古きドイツ学生歌を引用している。

Ganz Europa wundert sich nicht wenig,

Welch ! ein neues Reich entstanden ist

すべてのヨーロッパは大いに驚く

新帝国の立ち上りを

さらにそれは又、この戦争のはじめまで、西欧人のいだいていた東アジアの観念は根本的に大革命をおこし、東洋のバランス・オブ・パワーは崩壊し、それはひいて西洋諸国にも重大な影響を与え、近き将来に、現実の政治状態になって固まってくるとも云っている。

二 条約改正と内地雑居

じつはこの戦勝の栄光とならんで、実質からいうとそれにも劣らぬ重大な国際的収穫があった。しかし何分にも、

一般人には直接関係がうすく、政府や識者が考えた程には高く評価されないで、見た目に花々しい戦争の大勝利にかすんでしまった事件がある。条約改正の念願の第一歩を達成したことだ。すなわちイギリスが難渋を示しつつも、他に率先してようやくロンドンで条約改正に調印してくれたのが七月十六日で、豊島沖に海戦の火ぶたをきったのは七月二十五日、そのあいだ十日しかなかった。

しかし明治歴史の半ばの苦難は、この条約改正の努力にあったといってもよい。明治五年、岩倉全權（具視）の一行が六十余名の大名行列をしたがえて米欧を巡廻しても、てんで相手にされず、御機嫌とりに鹿鳴館で長夜の宴を張って狂歓乱舞してもいたずらに識者の顰蹙を買ったばかり、その反対に強硬政策にできれば、外務大臣の隻脚が爆弾で吹とぶという騒ぎだった。

それが井上馨、大隈重信、青木周蔵と三代の外交家が脳漿をしぼり、陸奥宗光の執念によって、ついにイギリス相手に成功の端緒をつかんだのは、当時イギリスが世界の指導的地位にいただけに、ゆくゆくは他の三十有余の条約国もこれにならう見通しが確実になった。時の外相陸奥宗光の「蹇々録」にいう。

「十七日（七月）晴天にいたり、外務省電信課長は、余が臥床につき一通の電信を手交せり。果然青木（ロンドン）公使の来電なり。曰く、今回の困難もようやく排除したる上、新条約は七月十六日を以て調印を了せり。本使はここに謹みて祝詞を天皇陛下に奉り、併せて内閣諸公に賀意を表すと。余は直ちに齋戒沐浴して宮城に趨り、御前に伺候し日英条約調印結了の旨を伏奏し、尋で青木公使に電信を發したり」

まったく唇齒の折るるも忘れるほどの喜びようである。

これらの事、丸善と関係がないであろうか。否、それが外国の書物雜貨の輸入を主目標とする丸善の仕事を刺戟せぬ筈がないのだ。条約改正はその事だけでも、日本人の外国関心を倍加するが、それには必然、外人の内地雜居がともない、今まで制限のあった内地のどこでも旅行し、どこにでも住むことがゆるされる。まるで外国にたいして、とざした兩戸をはずして風の吹きこむにまかせたも同然である。丸善の仕事にとって、これほどフェボラブルな条件はない。

三 「丸善社史」の欠漏

いま「丸善社史」(昭和二十六年刊)について、その状況を見よう。「第三編 第三章 日清戦争と營業の好転」の第一節「各店売上高の増進」の項に、まず概況としてこう書いてある。

「日清戦争前までは一般の不況の影響を受けて丸善の経営も意の如くでなかったが、戦争の進展につれて景気は漸次好転し、戦勝によってその気運は更に高められた。先ず書店の売上に就て見るに、二十七年及二十八年には各々八万五、六百余円であったものが、二十九年には一躍倍額に近い十五万八千余円に達し、三十年には十六万七千四百余円に及んだ。」

その次に、戦争の好影響を叙してこうある。

「次に唐物店に就て見るに、戦争勃発の二十七年後期より好景気を反映し、軍の北方奥地に進むにつれて、手袋、靴下、シャツ等の軍需品の需要が大いに増加し、原価の二倍或は三倍という値段で売行き、品物が不足し、

俄に製造したり、或は電報で外国に注文する等の活況を呈するに至った。唐物店の売上高は二十六年度迄は六万円代に止まっていたのが、二十七年には七万二千二百余円に、二十八年年度には十万二千二百余円に達し、殊に二十八年の十月の販売高は十一日迄に一万円を超過し、廿五日迄には二万円以上に及んだ。販売高がかくの如く高額に上ったのは唐物店開業以来だといふので、祝宴を開いて店員一同喜びを頒つ有様であった。十一月に於ても十六日迄に一万円以上の売上があり、又もや祝宴を開いてゐる。」

さらにこう付記している。

「書店、唐物店の好況に伴って、菱屋、工作部、輸入部もそれぞれ好成績を示した。菱屋の売上高は、二十六年が六千二百余円、二十七年が七千九百余円。(略) 工作部に於ては、二十六年に二千四百余円、二十七年には三千三百余円であつたのが、二十九年には四千九百余円、三十年には六千二百余円と上昇してゐる。輸入部に就ては二十八年迄の売上高は不明であるが、二十九年には六万六千余円に及んでいる。」

区分	年次	
	明治二十六年	同 二十七年
書店売上高		同 二十八年
唐物店売上高	六四、七八九・九七九 ^円	八〇、五八〇・六四七 ^円
菱屋売上高	六、二九三・九七一	七二、二四五・四三九
工作部売上高	二、四二六・三四六	七、九八八・六〇八
		三、三四九・七五三

日清戦争時代にたいしての記述の全文はこれだけである。これで先ず怪訝に堪えないのは、丸善は司 現会長の言明にもある如く、洋書の輸入が枢軸であり、現に上記の表でも、二十七、二十八の両年にわたり、書籍部の売上が最高額を達している。しかるにこの記述は、手袋やシャツの軍需品需要が大いに増加したこのみを書いて、かんじんの書籍については一言も触れておらぬのは、どうしたわけであらうか。

多分、数度の火災で、資料は全く焼失し、この期間のカタログさえ一冊として残っていないからであろう。そうとすればその後さらに戦災を経過している現在となつては、まったくこの記事にたいする増補の手段がない。しかも後の大を成した丸善なら、他の新聞雑誌を涉猟しても、若干の史料は発見し得られるが、このころはまだ微弱で、そういう外間資料もほとんど見つからぬのである。

しかしそこに散見する関連記事によつて、推察をつけることは必ずしも不可能ではない。

四 日清戦争をめくり

日清戦争の勃発とともに、大森は西にすすみ、明治天皇は広島大本営に御駐蹕になった。いまだ通信機関が幼稚で、情報を早く入手するに、東京では遠すぎたのが主因だと云われる。そして広島を臨戦地区と指定し、そこでつまり陣中に御滞在、翌年の四月まで八か月。天皇の御生涯でこのように長く東京の皇居を留守にせられたことはない。したがって閑余に天覧に供せられた書物や絵画はいろいろあるが、中で最も異色と思われるのは、武官齋藤実

海軍少佐（のち総理大臣）ののこした日記にみえる左の記事である。

「十月（明治二十七年）十七日 夜、御前に於て酒吞（顛）童子の巻物拝見被仰付。

十月十九日 御前に於て巻物三種拝見被仰付。（大職冠、しゃな王、鳥羽絵）

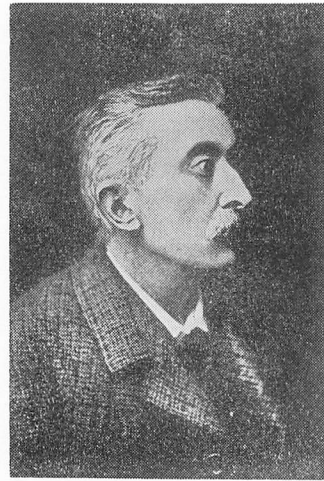
十月廿五日 米国なる知行（斎藤の従弟）より送り越したるインタルナショナル・レビューの戯画を御覧に供し、御前に於て説明を為す。

十一月廿八日 御肴頂戴。御前に於て東錦絵の日清戦争に関するもの二冊拝見被仰付。此錦絵は常宮様より献上の由。

十二月四日 御前に於て絵巻物並に支那錦絵拝見被仰付。」

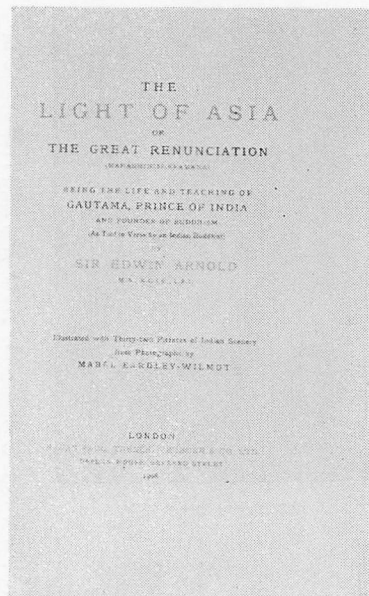
右のうち特に注目すべきは、アメリカの「インタルナショナル・レビュー」(International Review) という雑誌

を天覧に供したことである。



ラフカディオ・ヘルン

ひるがえってラフカディオ・ヘルン (Lafcadio Hearn) を見る。東京帝国大学教授になるより前だから、この前後と考えるが、たしか京都の絵草紙屋の店頭に、十年か二十年前のアメリカ雑誌二冊がころがっているのに目をとめて、まことに珍しいとして買い求めている。つまり日清戦争の頃までになると、西洋雑誌が上は天覧に入り、下は千年の旧都の巷塵のなかに見出



Sir E. Arnold-The Light of Asia

だされるまでになった。

元より天覧に入った「インタナショナル・レビュー」は、文中にある通りアメリカから直接に送られたものである。ヘルンの求めた古雑誌も恐らくは外人の観光客がよみすてたもので、もと丸善から買ったという可能性はうすい。

しかしこの記事を縁にして、丸善の明治時代の遺老に、宮中に西洋雑誌をおさめたことは無いかと聞いてみると、フランスの「リリュストラシオン」(L'Illustration) ほか、二、三の画報類をおさめた。それは宮内省で消毒した上で、天覧にそなえるのが例になっていると聞いていたという。何年ごろから「リリュストラシオン」が宮中に入るようになったか、宮内庁にはその綴じ込みが残っていないか。

ラファディオ・ヘルンは日清戦争のころは「神戸クロニクル」の記者であり、明治二十八年の年末から東京大学英文学部の講師として迎える交渉が始まり、翌明治二十九年、話がまとまって、それからあの光彩陸離たる講義が前後八年つづいた。

その間、ヘルンはしばしば学生に懸賞論文をかせ、賞としてテニソン詩集、ボウ全集、ハウソン全集などを与えた。もちろん日清戦争より数年のちのことだが、これらは丸善から購求したものと判断してあやまるまい。

日露戦争の前に来遊していたイギリス詩人にエドウィン・アーノルド (Sir Edwin Arnold) がおり、在日の二詩人としてヘルンと併称せられた。日本女性をめとった点でも似ているが、貞実にして内助の功の多かったことは小泉節子夫人がまさるとしても、アーノルドは Sir の称号を有する貴族で、したがって瓊子夫人もまた Lady の敬称で呼ばれた。日本女性にして Lady の榮譽を勝ち得た最初として大いに世に喧伝せられた。

彼の最大傑作は *The Light of Asia; or The Great Renunciation* (MAHÂBHINISHKRAMANA); being *The Life and Teaching of Gautama*. 1879 という一大長詩で、つまり釈迦伝だが、発行後たちまち英米のベストセラーになった。高楠順次郎が「大聖釈迦牟尼仏」として全訳している。なかなか苦心の跡の見える訳である。ヘルンの著作は、過半が日本に関するものだが、アーノルドには数多き著作中、日本に関するものは少なく *Japonica*. 1891 の一書が最もきこえ、外形も豪華絢爛たる美本、内容も純朴掬すべき妙味がある。

日清戦争が始まった時、彼は英本国にかえっていたが、陸の結戦の成歎・牙山の役に、一喇叭手白神源次郎が、咽喉をうたれて血を吐きながら、なおも進軍喇叭を吹きやめなかったという戦場美談を聞いて感激し、一詩をデズリイ・テレグラフ紙(当時タイムスについての有力紙でイギリス一の紙数が出ていた)に投じ、それはすぐに日本にも原文に訳文(天溪居士・大和田建樹)をそえて紹介せられた。

A Japanese Soldier by Sir Edwin Arnold
Shirakami Genjiro
Bulger in the line !

You shall let our Westerns know

Why the Kiku shine !

Why the Sun-flag, gleaming

Bright from field to field

Drives the Dragon, screaming,

Makes the Pig-tails Yield (以下略)

あわれ歩兵の喇叭卒

其名は白神源次郎

菊の色香のただひとり

かをりみつるは何故ぞ

朝日の旗風ただひとり

よわりし竜をおひまわし

豚尾の軍に打ち克ちて

輝く故は何故ぞ

ただ源次郎汝こそ

われらに謂はれを語りたれ

(第二節以下略)

当時、東京大学にはカール・フロレンツ(Karl Florenz)がドイツ文学の教師として赴任していて、彼も日清戦争について一詩をつくり、アーノルドのと並んで喧伝せられた。

Nach Pekin von Karl Florenz

1

Mit Trompetengeschmetter die Truppen Zieh

Und im Winde die Fahnen fliegen

Wie das Auge erglänzt, wie die Wange glüht !

Esgeht Ja zum lustigen Siegen.

Dem Kaiser zur Ehr, dem Lande zur Wehr,

So opfern wir freudig das Leben,

Der Vater würdig durch Wunden und Tod

Der Nachwelt ein Beispiel zu geben

Auf, lassset uns ziehn

Nach Peking ! Nach Peking !

喇叭の声にすすみゆく

あな勇ましの軍隊や

肌をつんざく朝風に

ひらめく朝日の連隊旗

あっぱれ見事のものゝふが

連戦みな勝つみいくさの

たのしき門出に今ぞゆく

君のおんため国のため

数にはあらぬわが身をも

捧ぐる時は来りたり

よしや傷つき倒るとも

祖先の世よりつたへたる

名をばおとさじ語りつぐ

のちのためしといざやわれ

いざやすみてゆくさきは

問はでもしるき北京城

問はでもしるき北京城（以下略）

五 女流の読書会

エドイン・アーノルドと親交のあった女性に、当時の駐日イギリス公使ヒュー・フレーザー夫人 (Mrs. Hugh Fraser) がいた。その著 *A Diplomatist's Wife in Japan, Letters from Home to Home, 1904* は、日清戦争のはじまる直前に帰国して、ペンがその事にふれておらぬが、しかしロシアの皇太子の湖南事件における東京の錯愕の様子、また大隈外相の爆彈遭難を見舞ったことなど、いきいきと描写し、永井荷風も愛読したことを、その「罹災日録」に記録している。

しかし特にここで、フレーザー夫人の著書について語るのは、その興味のためではない。じつは彼女は、知り合いの日本女性を、月に二度ずつ日をきめて自邸に呼び集めて、*English Reading Society* をひらき、イギリス文学をよみ、かつ批評し合ったと書いている点がとくに注目すべきだと思う。しかし参加女性の半ばは英語をよく解しなかったであろうし、多少心得があっても、自由に会話し、読書するには学力不足である。そこで或る書をえらんで、語学の達者な女性に日本訳してもらって、みんなで読み合うことにした。この訳者としては最も格好な夫人が見つかった。

ある *College* の教師の夫人で、彼女自身、近代教育をうけ、日本の雑誌や評論誌に寄稿しているチャーミングで、モDESTなレディである。(前後の記事から見て若松賤子ではなかったかと思える) 彼女自身も日本婦人が家庭に閉じこもって単調なる生活に終始しているのを破って、なにか面白くたのしめるようなことに貢献したいと念

願していたので、不才その任に堪えないと日本婦人の常として遠慮しながら、しかし情熱をもって、翻訳の仕事をはなす、最初のテキストとして *Exile of Siberia* がえらばれた。

これは十九世紀初頭の有名な話で、シベリヤ流刑囚の娘のエリザベスといって十六歳になる少女が、父の赦免を哀願するため、単身徒歩でシベリアを横断して、セントペテルスブルクの宮殿までおもむき、世界を感動させた。フランスの女流作家ソフィー・コタン *Elisabeth ou les Exiles de Sibirie* が原典だが、長短難易さまざまの英語物語がでているから、いずれ会合で読むに適当な短さの *retold story* がえらばれたであろう。

来会者に皇后のお側にいて英語に熟達した女性があり、原文と訳文と対比して、謬りなきをたしかめ、その日になるとフレーザー夫人が先ず英原文の数節をよみ、つづいて日本訳が披露されるという方法をとったが、二週間に一度ずつ会合し、数夜をついやして終った。みんな興味をもった。

次ぎは妻のヒロイズムを題材としたもので、*Lady Nithsdale* が塔中の幽閉から夫を救い出す話だったが、*splendid story* というので、参加者は帰宅してから家族に語り伝えたばかりでない。皇后の侍女たち (*the Empress ladies*) は「高貴のお方様がたにおよみ聞かせ申し上げたいから、この訳稿拝借ねがえますまいか」とひかえ目に申出た。第三番目にはスコットランドの聖女マガレット女王の伝をえらび、参加者は感動のあまり "*Hearts are alike in Europe and Japan*" と云った。

英語は元来福沢塾の書生から日本中に広く流布する端がひらけ、坪内春のやの「当世書生気質」では、まだ英語をはなす女は出て来ないが、つづく二葉亭の「浮雲」になると、そういう女書生あがりのような者があらわれる。

それが日清戦争を前にしては、このように上流ないし宮廷女性の間にまで外国語は侵潤してゆく。「不如婦」のモデルとなった大山信子などは娘時代に英詩までつくっている。(木村毅著 伝記小説「大山元帥」をみよ)これらの事が丸善と直接関係があったという確証はないが、丸善の使命の洋書普及をとりまく雲環として、あるいはヒンタラントとして見ることは出来るであらう。

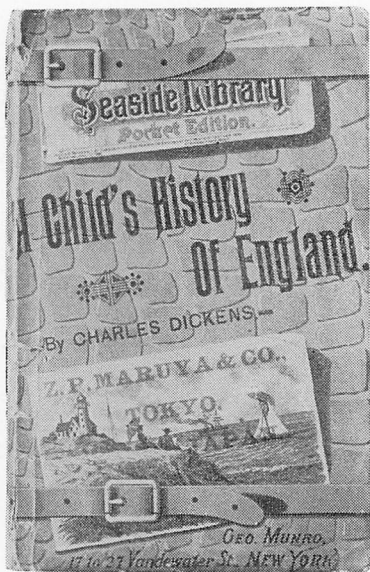
六 翻訳された西洋小説

ここで試みに、このころ、いかなる西洋小説がわが国に訳されていたか一瞥しよう。

明治二十七年

二人の老翁	トルストイ	操岳仙史	裏錦
損 辱	ドストエフスキイ	内田不知庵	国民之友
冷 熱	ボッカチオ	尾崎紅葉	読売新聞
靴 師	トルストイ	小西増太郎	国民之友
林と野と	ツルゲネフ	探美生	しがらみ草紙
猛 虎	バルザック	松居松葉	珍談倶楽部
ABC組合	ユーゴー	抱一庵	少年園
脚本嫉妬女房	モリエール	須藤南翠	大阪朝日

鷹 料 理	捨 小 舟	野 薔 薇	剣 俠	た から 島	幽 囚	ア カ チ ヤ の 花	村 田 と き	ク レ ツ エ ー ロ ア ソ ナ タ	お か め 八 目	ア ン ジ ュ ロ	明治二十八年		白 髪 鬼	人 の 運	嬢 一 代	オ ブ ロ モ フ の 幼 時
ボ ッ カ チ オ	ブ ラ ッ ド ン	リ ッ ト ン	ウ エ イ マ ン	ス チ ヴ ン ソ ン	ベ リ コ	ヨ ー カ イ	リ ー ド 女 史	ト ル ス ト イ	ロ チ	ブ ー シ ュ キ ン			コ レ リ 女 史	ブ ラ ッ ド ン	バ ア サ ・ ク レ イ	ゴ ン チ ァ ロ ー フ
尾 崎 紅 葉	黒 岩 涙 香		森 田 思 軒	卯 の 花 庵	湖 生	緑 野 野 史	幸 徳 秋 水	小 西 増 太 郎	飯 田 旗 軒	無 名 氏			黒 岩 涙 香	同	同	探 美 生
四 つ の 緒	扶 桑 堂	婦 人 新 聞	日 々 新 聞	文 芸 俱 楽 部	青 年 文	早 稲 田 文 学	国 民 之 友	国 民 之 友	春 陽 堂	裏 錦			扶 桑 堂	同	同	し が ら み 草 紙



Seaside Library

三 個 条 ボッカチオ 尾崎紅葉 四つの緒

(岩波講座の「西洋文学翻譯年表」斎藤昌三編による) これはもちろん網羅してあまざずとは云えず、あるいは若干の謬ちもあるかと思うが、当時の外国文学摂取の程度をさぐる手がかりには十分であろう。

これらの原作がみな丸善を経由したものと云えない。小西増太郎はトルストイの直き弟子であり、その原文はロシアから自分でもたらし帰ったものであることが明かである。飯田旗軒もベルジュームの商業学校出だから、この「おかめ八目」の原著「日本の秋」もあるいはヨーロッパで手に入れたものかも知れぬ。その他はだいたい、丸善で購求したものではないかと推察される。

かつてこれを川島忠之助翁から、じかに聞いたことがある。翁が明治十一年「八十日間世界一周」の翻譯を出して、明治文壇、海外文学移植の先頭を切った功労者たるは、今さら云うを要しない。

この小説が出ると、矢野龍溪が一読して感歎し、新聞小説は「高橋お伝夜叉譚」や「島田一郎梅雨日記」のような草双紙や講談を止揚して、こういう物にかわって行かねばならぬと考え、まず「八十日間世界一周」の英訳を購求し、その裏表紙にある広告によって、全部それを注文してみた。来たのはシーサイド・ライブラリーやロペル・ライブラリーのような低俗な小説のシリーズだったらしい。そのうちヴェルヌやチョッケやボーのような、いくら

が高級に属するものは森田思軒の嗜好にかなひ、ガボリオ、ボアゴベ、ミス・ブラッドンのような探偵小説は黒岩涙香が専門のようにして翻譯するに到った。

後年、この筆者は涙香所蔵のシーサイド・ライブラリーとロベル・ライブラリーを一山、古書肆の店頭で買いつけた。その中には書きこみのあるブラッドンの「ノー・ボディ・ドクター」(捨小舟)の原本もあり、久しく珍藏していたが、大戦中の書物疎開のとき、みな散逸したので、果して丸善のラベルがあったか、どうかを記憶せぬ。森田思軒の旧蔵書も多く入手し、これは今も保存しているが、明白に丸善のラベルが貼つてある。云い換えれば、明治文壇に翻譯王の名をかち得た思軒が丸善から多くの書物を購求したことは確かだ。もっともそのラベルの貼つてない書物もある。彼は若いころ洋行し、その時多くの書物を購求してきたと自から語っているから、丸善の手を通さぬ蔵書も、もちろんあったのだ。

「村田とき」の原作リード女史とあるのは、ウード女史の誤植であろう。原作はおそらく「イースト・リン」で、一種の貞操美談だが、とうていイムボシブルの事件の連続の不自然な構想だとしても、人の肺腑をつらぬく鋭さがあり、この当時婦人雑誌を始めとして幾種の訳が出ており、それを幸徳秋水が訳したのだとすれば、なるほど彼の好みそうなどころがある。秋水は国民英学会に英語をまなび、海外に直接注文の手づるなどもたなかったから、これ亦丸善の手を通して入手したものであったろう。

ここに興味のあるのは涙香の訳した「嬢一代」の原作者バーサ・クレイ (Bertha M. Clay) である。この正体曖昧の女流作家は、最初に末松謙澄が発見しその Dora Thorne を二宮孤松との共訳で「谷間の姫百合」(明治二



B. M. Clay-Dora Thorne と邦訳「谷間の姫百合」

十一年」と題して訳したところ、侍従藤波言忠の手を通じて皇后（昭憲皇太后）に献ぜられ、台覧に入って、「早く後篇を見たいから訳者にその旨を通知せよ」との令旨まで賜わった。乙夜に供えられた西洋現代小説はあとにも先きにも、知られている限りではこれ一篇である。

このバーサ・クレイの作を数々愛読したものに尾崎紅葉がある。その「不言不語」（明治二十八年）の作が、彼女の作の雛案なるは自ら語ってひろく文壇につたえられた。明治の最大作といわれる「金色夜叉」も友人江見水陰などの話でみると、やはりさきの「ドラ・ゾオン」であること、ほぼ、まちがいない。（木村毅の「バーサ・クレイと明治文学」にこの詳細な考証がある）

紅葉は門下にも彼女の作をあたえて読ませたので、この筆者は村山鳥径が所持していた紅葉の遺品でクレイ作の *The Broken Wedding Ring* を入手し、学生時代に西洋通俗小説のよみ始めは、じつにこの作であった。久しく珍藏し、紅葉のサインがあったことを明確に記憶するが、丸善のラベルがあったかどうかを覚

えぬ。というよりその頃はそういう事に一こう頓着しなかった。しかし大正の初期までクレイの作が、時によって丸善店頭に山のように積まれ、筆者も何度か求め、後年の版だが問題の Dora Thorne は一本を今も書架に蔵する。

大阪毎日新聞の小説家の菊池幽芳がまたクレイの愛読者で、ある婦人会の講演で、彼女の作を講談にかえ、もって新聞紙上から旧態を払拭したいと主張しているほど賞揚し、ひところ洛陽の紙価を高うしたといわるる「乳姉妹」はやはり「ドラ・ゾオン」の後半の翻案なること、これは何人にも一目瞭然である。大阪の丸善支店で購求したというより外に、考えようがない。